

【特集 教育における ICT 化】

図書館ラーニング・コモンズ設置の取組

附属図書館事務部長 山田周治

1. 図書館とラーニング・コモンズ

近年、ラーニング・コモンズは、大学におけるアクティブ・ラーニングの要になる施設として、全国の大学で設置が進んでいるが、場所として大学図書館の中に設置されるケースが少なくない。理由としては、多くの大学で、図書館がキャンパスの中でもアクセスしやすい便利な場所に設置される場合が多いことのほかに、次のような点が考えられる。

- ① 規模の大きい大学の図書館では、一定の広さのオープンスペースの確保が可能なこと
- ② 学術資料との近接による学習効果の高さが期待されること
- ③ 図書館職員による確実な運営サポートが可能であること

ところが本学では、キャンパスのおかれた特殊な状況から、最も基本的な①の問題、すなわち全学の^{かなめ}要となるような広いオープンスペースの確保が、図書館も含めて全学的に難しいという問題がある。本学におけるラーニング・コモンズの在り方を検討するグループ「全学ラーニング・コモンズWG」において、既存の中・小規模の自習施設の機能を一定のレベルで整備し連携させるという、神大独自スタイルを検討することになったのは、そのような事情からであった。

さて、図書館に設置するラーニング・コモンズも、神戸大学スタイル・ラーニング・コモンズ群の構成要素となるわけであるが、上記②③の特徴から、その中でも大きな役割を果たすことになるものと考えている。



人文科学図書館に設置する図書館初のラーニング・コモンズ。南側が全面ガラスなので開放感がある。(平成 25 年 4 月オープン予定)

2. 図書館ラーニング・コモンズの4つのポイント

図書館では、全学ラーニング・コモンズWGが発足する前の平成 23 年度に、若手職員によりラーニング・コモンズの調査を実施した。ここではその結果を交えて、ラーニング・コモンズに対する図書館の考え方のポイントを記す。

1) 主要な対象者を絞り込む

重要と考えるべき対象者が、学部1～2年生であることに異論はないであろう。大学における学びのスタイルを早く身につけさせるため、早い段階での共同学習型授業が、今後はより一層充実されていくものと考えている。また、研究室という居場所を持たない学部1～2年生にとって、図書館は身近な場所でありたいと考えている。このため、ラーニング・コモンズの設置場所としては、学部1～2年生の授業が多く行われる場所にある総合・国際文化学図書館が最も適している。同様に、自然科学系図書館も、アクセスのしやすさという点で整備を優先したい場所である。

いまひとつ重要な対象者と考えているのは、討論型の授業が伝統的に行われている社会科学系の学生である。社会科学系図書館も、優先的に整備を行ってきたい。

2) 施設設計の鍵は静粛エリアとの切り分け

図書館にラーニング・コモンズを作るということは、施設の面から見ると、静粛であった建物の中に、話してよい場という異質なエリアを設けるということになる。静粛な学習の場はこれからも保証していく必要があるので、話してよい場といけない場を空間的にどのように切り分けるかが、施設設計上の最大の問題となる。

他大学の例で最も参考になったのは、フロアで切り分ける方法であった。カウンターのある最下層のフロアをラーニング・コモンズ専用のフロアとし、上階に行くにしたがってより静粛なエリアとするという方式である。騒がしくなりすぎないように管理するため、職員に近い場所にラーニング・コモンズを置く、という点からも合理的な配置と言えよう。本学では、総合・国際文化学図書館と自然科学系図書館でこの方式の適用が可能で、しかもこの2館では比較的広いスペースをラーニング・コモンズに充てることができる。その一方で、もともと規模が小さく、フロアでの切り分けが不可能な館では、図書館の外にある施設との連携も含めて、慎重に設計していく必要がある。なお、人文科学図書館では、集密書架へ多額の投資をすることで場所を確保した。

今ひとつ、施設のこととして、広さの問題を指摘しておきたい。実は昨年から社会科学系図書館に、会話と軽飲食も可とする休憩室を試行的に設置したが、必ずしも目論見どおりには使われていない。先にだれかが静かに勉強をしていると、後から来た人たちは、話も飲食も遠慮して出て行ってしまうようなのである。原因のひとつは広さにある。一定以上の広さがあれば、どこかでだれかが話を始める。それを見て、次に来た人たちも安心して話を始め、次第に全体が議論の場となっていく。広さはラーニング・コモンズにとって重要な要素なのではないだろうか。図書館では、可能な限り200㎡以上の広さを確保したいと考えている。

3) 設備設計の鍵はフリースタイルの家具

ラーニング・コモンズに入れば、そこが話してよい場だと分かり、活発な議論が始まる。逆に、たとえフロアが同じであっても、そこを離れて静粛なエリアに足を踏み入れれば、話をしてはいけない場だと自然と理解され、静かさが保たれる。このようなメッセージを、内装や置かれた家具に語ってもらうことが理想である。

他大学の多くのラーニング・コモンズでは、机・椅子は一律にカジュアルで移動可能なもので統一され、学生たちが自在に組み合わせて使うことが出来るようになっていた。また内装は明るく活動的で、中にはポップとまで言ってよいほどの印象に仕上げられたところまであった。そしてこれらが、不思議に機能していたのである。本学図書館においても、これを踏襲したいと考えている。



カジュアルで組み合わせ自由の机・椅子・ホワイトボード。

上: 奥側の演習スペース

下: 手前側のフリースペース

4) 運営の鍵は図書館からの「仕掛け」

昨年に調査した職員から、もうひとつ重要な指摘があった。各館に、それほど広いラーニング・コモンズが設置できない本学の図書館では、他大学のように、なかば放っておいても自然と賑わうということにはならないだろう。図書館から活用してもらうよう積極的な働きかけ＝「仕掛け」が必要だ、というのである。ここでいう「仕掛け」とは、たとえば学習アシスタントデスクの設置、図書館ガイダンスの実施、ミニ講演会の開催からサークルの発表会に至るまで、あらゆるものが考えられる。

我々が職員の目は確かであると感じている。本学図書館のラーニング・コモンズのポイントとして、図書館からの「仕掛け」をあげておきたい。

3. 神戸大学図書館スタイルのラーニング・コモンズ

単なる共同型学習の施設ということであれば、図書館ではすでにグループ学習室を設置・提供してきており、実際、活発に利用されている。ラーニング・コモンズをそれらとは別の物にしている最も重要な点は、オープンな空間である、ということにある。互いに見る見られ、話し声も入り交じるといふ、いわば節度ある喧騒のなかで、知らず知らず回りから刺激を受けとり、自らも回りに刺激を与えている。そこに図書館からも、様々なイベントを「仕掛け」することで、さらに真摯・自由・共同の輪が広がっていく。そのようなオープンな学びの空間、神戸大学図書館スタイルのラーニング・コモンズの現出を目指したい。



雨上がりの夕刻に、中庭からラーニング・コモンズを望む。